

# 北沢の大石棒

縄文の石神

5000年前  
日本最大  
**223**  
cm



北沢の大石棒



石棒王国 信州・佐久

ハヶ岳東麓、千曲川支流北沢川沿いの田園地帯。通常破損して出土することの多い石棒だが、「北沢の大石棒」は大正年間、北沢川改修工事の際に発見された完形で、以来この地に立てて保存されてきた。現在は、佐久穂町の有形文化財に指定されている。巨大な凝灰岩から作られており、全長 223cm、直径は 25 cm に及ぶ。現在でもこれを凌ぐ長さの石棒は知られていない。

隣接する北沢川右岸の段丘上には縄文中期後半～後期の佐久西小学校裏、宮の本遺跡、左岸には北沢遺跡があり、石棒自体も同時期に作られた可能性が高い。しかしなぜ、眼下の沢から巨大で完形の石棒が見つかったのかは、謎のままである。

縄文時代のマジカルな遺物としては土偶があるが、佐久地域では 200 点程に過ぎず、その一方で、石棒の発見例が目立つ。佐久市東部から秩父地方の岩石が材料となるからか、あるいは当時の人々の信仰の表れなのか。いずれにせよ、北沢の大石棒はその象徴と言えよう。

(北相木村考古博物館 藤森英二)

縄文時代の信仰に関わる代表選手に、“土偶”と“石棒”とがある。一般に土偶は女性像(妊婦)、石棒は男性のシンボルといわれる。しかし、佐久では土偶というものにはあまり執着していなかったようで、もっとも多量作られる中期でも、出土数は他地域に比べ少ない。

これに対し、石棒には強いこだわりがある。日本最大の大きさを誇る北沢の大石棒をはじめ、佐久市入沢の大宮諏訪神社に奉納されている石棒はそれに次ぐ長さ 152 cm と、これまた全国でも有数の大きさを誇示する。また、小海町の穴沢遺跡からは縄文時代中期初頭という国内でも最古級の石棒が出土、全国でもいち早く石棒を使い始めている地域なのである。佐久は石棒信仰の拠点とあってよいだろう。

石棒に願いを込め、祈りを捧げた佐久の縄文人。石棒は、佐久の縄文文化を彩る貴重な考古遺産である。

(長野県埋蔵文化財センター 桜井秀雄)

伊藤に立つ石棒、頭部の作り出しがなく、無頭石棒と呼ばれる。現代田町滝沢遺跡の竪穴住居から出土した。左側の 2 番目、38cm のもの。

写真：長野縄文ミュージアム





# 5000年の命の結晶を 未来へつなぐ



# 石棒に願いをこめた縄文人

北沢川のほとりで 5000 年の眠りについた 2 m を超す大石棒が掘り起こされたのは、大正時代のこと。

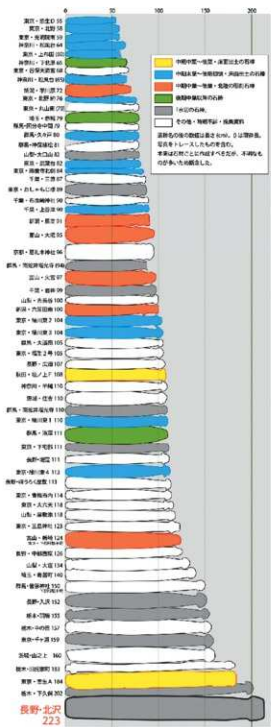
以来 100 年、縄文の石棒はこの地に立ち続け、軍靴の響きから、敗戦と復興、高度経済成長、そして新たなハイウェイ建設までを見続けてきた。

子どもの豊かな成長を願って訪れた親がいた。赤ちゃんをどうしても授かりたいという願いを込め、この石棒を撫でさせたカップルもいた。そうした石棒への願いは 5000 年前も現在もおそらく変わらないことと思う。

長い間の風雪に耐えた石棒も、近年、表面の剥落やひび割れが目立っている。5000 年の命の結晶を今ここで破損するわけにはいかない。さらに 5000 年後の未来へとつなぐのだ。(浅間縄文ミュージアム 堤 隆)

自然の中で生き抜いてきた縄文人は、殊更「生と死」に敏感だったようで、縄文時代草創期以来の土偶、中期以降に石棒や顔面把手付土器、後期以降にはさらに多種多様な生・性に関わる呪術具を作り出した。それらの多くは、手の中に納まる大きさがだったが、石棒は長さ 1 m 近くにもなる大きなもので、柱状節理のある特定の産地で丁寧に作られた、第 1 級の呪術具であった。

石棒はその形状や、しばしば凹みのある石皿や土器などと対置して出土することから男性の象徴と考えることができる。中期の中部高地では、炉辺に立てた例がある。また、中期後葉～後期初頭の南関東では住居の廃絶に際し、火を放つなどして石棒も一緒に廃絶する儀礼が行われた。さらに、谷や水辺などから後期前半と思われる石棒がほぼ完形で掘り出されることもある。しかし、その多くは土偶同様破損して出土するのである。



## 行ってみよう! 北沢の大石棒



# 石棒背へつなぐ

作図・中村耕作